

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻146号 平成28年1月1日発行

「修身教授録」探求 (第一百回) 質問

森 信 三

諸君らの希望もあるようですからもう1時間質問を受けることにいたしました。う。何でもよろしからどしどし質問しなさい。他の組ではいろいろ質問がありましたから…。

第一問「先生、お目出度くない人間とはどのような人を言うのですか」

答 道の為には死をも拒まない人間を言うのです。例えば大楠公とか吉田松陰先生のごときはその典型な方でしょう。また西洋でいえばソクラテスとかキリストのように、道のためには常に死を覚悟して生きた人を言うのです。

第二問「誠とはどういうことを言いますか」

答 誠とは私心私慾を打ち捨てた命がけの態度を言うのです。誠とは私心私慾を捨てることとは大抵の書物にも説いてあり、人もよく言うことですが、真の「誠」にはこの「命がけ」ということがなくてはならぬと思います。でないで結局言葉だけで無力なものになってしまいます。

私が申していることは今後20年ぐらい経つと諸君らのすべての人が「ハハあ」と肯かれるようになりましょう。

第三問「教育者というものはどういうことを第一に心がけたら良いでしょうか」

答 いろいろな方面から言えましょうが、今ひとつの側から申せば、いやしくも教師として教壇に立つ以上その言うところの言葉は何時何処どこで何人に伝えられてもやましからざるものでありたいということですね。理想としては、千万年にわたって変わらぬ大真理を伝え得たらと思えますが、しかし我々凡人では到底そういう事は出来つこありません。しかしせめて20、30年間ぐらいは生命をもって相手の心の中に生きる言葉でありたいものです。つまり生徒が大きくなってから、「ああ、あの頃はぼんやり聞いていたのでそれほどにも思わなかったが、しかしあの頃のあの先生の仰有つられた意味が今にして初めて分かる」と感じるようにありたいものだと思います。それには結局現在自分の教えている生徒たちの10年20年先を見通しつつ現在の一言一言を教えるということでしょう。

第四問「衣食足って礼節を知るといって諺

は必ずしもそのみとは思いません。というのとはなるほど宗教というものは個人の私慾を捨てさせる上には確かに効果があります。これ宗教の長所であり宗教独特の受け持ちと申してよいでしょう。では宗教の短所は何かと申しますと、宗教というものは、うっかりすると国家観念を希薄にする恐れがあるということですが、すなわち宗教の対象を絶対的として信じるところから国家以上のものありとして、国家の絶対性という点において時に遺憾なことを生ずるおそれがないとは言えないのです。大本教おほもとけいの如きはその顕著な一例です。しかし日本人として国民道徳に真に身をもつて徹するためには、どうしてもまず私心私慾を除かねばなりません。ところでその際私心私慾を除くにはどうしても宗教によるのが早道のようにです。宗教をこういう意味に生かすというのが、私は日本人としての大道だと思えます。どうも宗教を通らないと、大義などといったもどこかに我見がけんの根が残りやすいようです。

第九問「神社は宗教でありましょうか」

(これにつき先生生徒に質し給うも、生徒間に宗教にあらざとの意見ありて一致せる見解成立せず)

答 神社はこれを宗教といえは広義の宗教の中に入りますし、かつ最高の宗教です。従ってそれは仏教・キリスト教などというような普通にいわゆる宗教と名付けられるようなものと対立する狭義の宗教ではありません。しかし同じく神道といつても、黒住教くろすまけいとか金光教こんこうきやうというようないわゆる宗派神道となりますと、これは仏教などと並ぶところの狭義宗教たること申すまでもありません。これに反して神社はこれら一切の宗教を超越して一切の宗教を有らしむる根本力です。

第十問「教師をしながら傍ら家の仕事を手伝うという事はいけなんでしょうか」

答 本当ではありません。本当に家業がやりたかったら、潔く教育者たることを辞めて家業に専心すべきでしょう。資産家、特に借家などたくさん持っている先生は、ちよつと大風でも吹きますと、もう自分の貸し家のことが気にかかり出すという始末です。教壇に立っていてもどうしてももう一つ身が入らないようです。いわんや職員室等において、自分の貸家の話などを持ち出すというようでは言語道断の沙汰です。(岡沢義夫記)

(修身教授録第三卷昭和18年9月 同志同行社刊)

神意の開頭 (微言)

森信三

○旧約日本は「大日本は神曲なり」を根本信条とするものであったが、今や敗戦を契機として日本は新約に転生するに至った。そうしてその根本信条は「世界史は神曲なり」という一語に要約せられると思う。

○「世界史は神曲なり」とは現実の世界史は少なくともその過ぎ去った跡についてみれば手筋一筋抜き差しならぬ必然を以て展開し、しかもその必然の微妙なること、全く神業というほかないところからいふのである。

○「世界史は神曲なり」とは、従って現実の世界史はいかなる国家民族の恣意をもつてしても左右することのできるものでないことを意味するといつてよい。

○世界史は、それが現実の歴史の実現である限り人間の営為を離れては一步も進まないことは改めて言う要しないが、同時に現実の世界史は、一切の人間の恣意を超越して進行する一面を見逃してもなるまい。

○歴史が人間的理性のままに進行するとみる観方は、人間本位論の究極として一応成立し得ることは事実であるが、ただ現実の世界史は人間的理性のままに動い

て来ていないことも知らねばならぬ。

○人類の世界史に対する関心が、今日ほど異常な高揚を示した時代はかつてないであろう。このことは今や人類全体が渾一的な一体への第一歩を近く踏み出そうとしている前兆と言つてよい。

○「世界史は神曲なり」ということは、これを裏返せば「世界史は審判（しんぱん）なり」ということである。

○神はA民族を審判するにあたり、B民族をしてこれに当たらしめ、さらにB民族を審判するのにC民族を以てする。審判せられた民族が、神意を畏み受くべきはいうまでもないが、神の審判に用いられた民族も、また自ら懼れ畏むところがなければならぬことは、ユダヤ族に対するペルシアおよびローマ国民という前例をもつても知ることが出来る。

○「世界史は神曲なり」ということを以て、何か神を架空の存在の如くに考える者があつたとしたら、妙じき（正直の誤り？）誤りである。要するに宇宙の根本力の絶対必然的展開をいうに外ならないからである。

○「世界史は神曲なり」とは世界史を以て宇宙の根本力の必然的展開を考えることではあるが、しかしその必然性とは個体の自由を否定する物理的必然ではなく

て、各々の個体的自由を承認した上で、しかもこれを全体の上から眺めてそこに絶大なる必然……神的必然……の存することをいうのである。

○物理的必然とは謂わば平面的必然である。そこでは個体の自由は全然ない。しかるに神的必然は、これに対してはまさに立体的必然とも言つべく、一切の個体が個体的自由を許されながら、しかも全体として絶対的必然の絶対なる因果の連鎖を為すをいうのである。

○神的必然の世界は謂わば物理的必然と道德的必然との総合である。而してこれが真の現実的必然でもある。

○我らの民族は今やこのような神的宇宙的必然に対して、その心眼を開かしめられつつあるといつてよい。而してこれのみが敗戦という絶大なる悲劇に対して神の与えたまえる唯一の報償である。

○古来いかなる民族が、世界史の展開を以て、神意の開頭と観じたものがあるであらう。

○古来いかなる国民が、神的必然を、現実の世界史の展開の上に認めたものがあるであらう。

○全人類にとって唯一にして最高なる真理が、今や我らの民族の上に啓示せられんとしているのである。

（「開頭」昭和24年7月5日発行 第28号7月号）

あとがきに替えて

あけましておめでとうございます。配送廃止後の第一号となります。今後いつまで続けられるか分かりませんが、今後ともご指導を賜りますようお願い致します。質問続編については、言うまでもなく森信三先生の慈愛と深い見識が滲み出ていて、教育関係者はもとより心ある方々の滋養となること必定。微言はこれまた70余年を経た現代でも一読の価値ある論考かと思ひます。しかし森信三先生が仰る日本民族への神の顕現は果たして国民が了知するに到っているかは？かなと思ひます。でもこの渾沌の時代、日本以外の国のどの国に世界をリードする力と備えがありましようや。唯一及ばずながら日本こそ世界からその座を希求せられる国家たる資格がありそうに思ひます。（29一繁）

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話 0744-4513422
Email: hji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn